

宗教哲学の現在を問う

——反本質論の波をうけて——

代表者 堀 雅彦

コメンテータ 深澤英隆

司会 佐藤啓介

宗教哲学は本質論を離れうるか

——多元主義の観点から——

堀 雅彦

「宗教」概念の歴史的構築過程への関心の高まりに伴い、宗教の「本質」を語ることはいま、様々な面からその妥当性を疑われている。そうしたなか、まさにその本質の解明ということを通じて従来根本課題としてきた宗教哲学は、もはやそのようなものを語ることをやめるべきなのだろうか。実際、宗教哲学者の中には、一つの有力な議論の方向性として、ウィトゲンシュタインの家族的類似性の概念を援用し、宗教に本質などないと明言する声もある。家族の成員すべてに共通の類似性が認められないのと同じように、すべての宗教に共通する類似性など、どこにもないというわけである。

しかしながら、複数の類似性が互いに重なり合い、あるいは交差しあう、その網の目のありようこそが宗教を宗教たらしめているのだ、という言い方もできるだろう。そのような観点か

ら示唆的に思えるのは、アメリカの文芸評論家、ケネス・バークが述べた、本質論とは一種の「投票」行為にほかならないという言葉である。つまり、本質の解明の名のもとに行われる多様な議論を、幾重にも錯綜する類似性のうち、いずれを最も重視すべきかについての投票行動として捉える見方ができるのではないか。

このようなメタレベルの視点を内在化させつつ、ある種の本質論へのコミットメントを維持している宗教哲学者として、本発表ではまず、ジョン・ヒックの議論に注目する。ヒックもまた、宗教には家族的類似しかない、との立場を取る。しかしながら、彼は同時に、そこに「普遍的とまではいえないとしても、極めて広範囲におよぶ一つの特性」、すなわち救済、ないし解放への関心という共通項が認められることに注目する。それは彼にとって、唯一でも普遍的でもないものの、最も注目すべき共通項である。そのような共通項に注目するときに見えてくるものの、また、そのような視点を取ったときにしか見えてこないものを、彼はとりわけ重視する。そのような視点の選択——これを私はヒック自身の投票行動と見る——の上に、彼が「宗教多元主義仮説」と呼ぶ議論は成り立っている。

他方、家族的類似の考え方を徹底すれば、「宗教」という家族のなかで交錯する複数の類縁性が、「宗教」の限界を超えて、それぞれ多方向に「宗教」外的な事象へと伸びている可能性もまた見えてくる。そのような可能性を極めて見やすい形で示した議論の例として、ここではウィリアム・ジェームズの宗教論に注目する。「個人的宗教」を「制度的宗教」よりもはるかに

パネル

本質的なものと見なし、また私秘的な感情や「言表不可能」な神秘的意識状態を事実上その核心と見なした彼の宗教論には、しばしば指摘されるとおり、一定の偏向があり、それに伴う盲点がある。しかし、まさにその偏向において、彼の宗教論は、当時の人々が一般に「宗教」と呼んでいたものの外側にある一群の思想運動へと、その射程を延ばしていった。「健やかな心の宗教」という彼の概念は、確かに一つの分類のラベルだが、同時に、そのような分類が可能な広さまで「宗教」を拡張する概念でもあったのである。

以上、〈投票としての本質〉という考え方に立ち、ヒックとジェイムズの宗教論、特にそれぞれの本質論の非包括性や偏向を積極的に評価しなおすことを試みた。唯一にして普遍、また不変の本質を論じることが、もはやできないだろう。しかしながら、「宗教」の内部で錯綜し、さらにはその外部へと伸びていく複数の類縁性（その輪郭は歴史の中で揺れ動く）のいずれかをとりわけ重要なものとして選び出し、そこから見えてくるもの、また、そこからしか見えてこないものを論じることがいわば「弱い意味での本質論」と捉えるならば、宗教哲学はどのような試みを放棄できないのではないかと私は考える。

「宗教の本質」と歴史性

——トレルチによるオットー批判より——

小柳 敦史

私の発表では、宗教哲学の現在を考えるための準備作業として、古典的な宗教本質論の内容を再検討した。そこで取り上げたのはルドルフ・オットーの『聖なるもの』である。オットーと同様に「宗教的アプリアリ」によって宗教の本質を規定しようとしたエルンスト・トレルチによる『聖なるもの』への書評（Troeltsch 1919）をてがかりに、本質論に対してしばしば為される批判とは異なり、「宗教の本質」の議論が歴史性への配慮と、論者によって程度の差を含みながら、密接に結びついていたことを示した。

『聖なるもの』に対するトレルチの根本的な批判は、オットーが「合理的なもの」と非合理的なものとの関係を規定するという本書の主要な課題にほとんど成功していない（Troeltsch 1919, S. 76）という点にある。オットーは「聖なるもの」を合理的なものと非合理的なものから合成されたカテゴリーであると設定していたのである。トレルチとオットーでは「合理性／非合理性」の理解に差があるため、トレルチの批判を鵜呑みにすることは出来ない。しかし注目すべきは、オットーが「聖なるもの」のうちの非合理的要素Ⅱヌミノーズではなく、非合理的な要素と合理的な要素（Ⅱ倫理的な要素）の調和こそが宗教